

令和3年度決算

伊那市の財務書類

(統一的な基準による財務書類)

【 概要版 】



長野県伊那市
(総務部財政課)

令和3年度 伊那市の財務書類【概要版】

I 財務書類について

1 作成の趣旨・経過

地方公共団体の会計制度は、予算の適正・確実な執行を図るため、その年にどのような収入があり、それらをどのような支出に使ったかといった、現金の動きを把握しやすい手法(単式簿記・現金主義)を採用しています。しかし、この方法では、道路や建物などの資産や、借入金などの負債といったストック情報、減価償却費などの非現金コストの情報が不足しています。

そうした弱点を補うため、各地方公共団体は企業会計的な手法(複式簿記・発生主義)を用いた財務書類の作成を進めてきました。しかし、複数の作成方式が混在しており、地方公共団体間の比較が容易でないことから、平成26年度に総務省から「統一的な基準」による財務書類の作成の要請があり、これを受け伊那市では、平成27年度決算分から「統一的な基準」で財務書類を作成しています。

会計制度の比較

現在の地方公共団体の会計制度

【単式簿記】
1つの取引について、現金の収支のみをとらえ記録する帳簿記入の方法
【現金主義】
現金の収入・支出という事実に基づいて、それを記録する考え方

議決された予算に基づく
現金の執行を厳密に管理

決算書類

並行して処理

統一的な基準による公会計制度

【複式簿記】
1つの取引について、原因と結果の両方から二面的にとらえ記録する帳簿記入の方法
【発生主義】
現金の収入・支出にかかわらず、取引が発生した時点で収益・費用を記録する考え方

説明責任の充実
マネジメント力の強化
他団体との比較

財務書類

2 財務書類(財務4表)とは

財務書類(財務4表)とは、貸借対照表、行政コスト計算書、純資産変動計算書、資金収支計算書という4つの財務資料の総称です。

(1) 貸借対照表(BS:Balance Sheetの略)

貸借対照表とは、地方自治体が住民サービスを提供するために保有している財産(資産)と、その財産をどのような財源(負債、純資産)で賄ってきたかを表したものです。負債は、将来世代の負担となる部分で、純資産は、現在までの世代が負担してきた部分を表しています。

貸借対照表のイメージ

借方	貸方
資産(住民サービスを提供するための財産) ex.庁舎、学校、道路、基金など	負債(将来世代の負担) ex.市債(借金)、退職手当引当金など
	純資産(現在までの世代の負担)

(2) 行政コスト計算書(PL:Profit and Loss Statementの略)

行政コスト計算書とは、人件費や福祉サービスの給付など、資産形成につながらない行政サービスに要した経費と、その対価として得た収入を示すものです。

行政コスト計算書上の収入には、行政サービスの直接的な対価のみを計上している(税収は計上されない)ため、純行政コストがマイナスで表示されます。

行政コスト計算書のイメージ

経常費用	ex.人件費、補助金
経常収益	ex.使用料、手数料
純経常行政コスト	
臨時損失	ex.災害復旧費
臨時利益	ex.資産売却益
純行政コスト	

(3) 純資産変動計算書(NW:Net Worth Statementの略)

純資産変動計算書とは、貸借対照表の純資産の部に計上されているそれぞれの数値が、どのように変動したかを表したものです。

純資産は伊那市が形成した資産のうち現在までの世代が負担した部分ですので、純資産の変動額は、世代間負担の重さの変動を意味します。

純資産変動計算書のイメージ

前年度末純資産残高	
純行政コスト(行政コスト計算書より)	
財源(税収等、国県等補助金)	
本年度差額	
その他	
本年度純資産変動額	
本年度末純資産残高	

(4) 資金収支計算書(CF:Cash Flow Statementの略)

資金収支計算書とは、現金の流れを「業務活動」「投資活動」「財務活動」の3つに区分して整理することで、どのような行政活動にいくら使ったのかを示すものです。

資金収支計算書のイメージ

業務活動収支	ex. 人件費、税収等
投資活動収支	ex. 施設整備、基金積立など
財務活動収支	ex. 市債(借金)借入、償還
本年度資金収支	
前年度末資金残高	
本年度末資金残高	

3 対象とする会計の範囲

伊那市では、財務4表を一般会計等、全体、連結ベースでそれぞれ作成しています。一般会計等とは一般会計に公有財産管理活用事業特別会計を加えたもの、全体とは一般会計等に特別会計・企業会計を加えたもの、連結とは全体に一部事務組合や外郭団体などを加えたものです。

伊那市財務4表の作成範囲

作成区分	連結財務4表		
	全体財務4表		
	一般会計等財務4表		
対象範囲	一般会計	国民健康保険特別会計	伊那市振興公社
	公有財産管理活用事業特別会計	国民健康保険直営診療所特別会計	伊那市観光株式会社
対象範囲		後期高齢者医療特別会計	上伊那広域連合
		介護保険特別会計	伊那中央行政組合
		市営駐車場事業特別会計	長野県上伊那広域水道用水企業団
		水道事業会計	長野県後期高齢者医療広域連合
		下水道事業会計	長野県地方税滞納整理機構
		自動車運送事業会計	長野県民交通災害共済組合
			長野県市町村自治振興組合

Ⅱ 一般会計等

【概要】

一般会計等とは、一般会計と公有財産管理活用事業特別会計を合算したものです。
【貸借対照表】
 基金の積立てなどにより、前年度と比較して資産が2,768百万円増加し、市債(借金)の減少により負債が348百万円減少しました。

【行政コスト計算書】

令和2年度と同様に新型コロナウイルス対策経費により、純行政コストは31,287百万円となりました。

【純資産変動計算書】

本年度純資産変動額は3,116百万円の増加でした。これは固定資産及び流動資産(金銭)の増によるもので、この分、次年度以降の市民への負担が減少した(本年度の住民から次年度以降の住民へ資源が渡された)ことを意味しています。

【資金収支計算書】

業務活動収支が前年度と比較して608百万円増加しました、資金収支は、本年度145百万円で、黒字となりました。

貸借対照表

資産(A)	118,896百万円	負債(B)	36,234百万円
伊那市が所有している財産の内容と金額です。行政サービスの提供能力を表しています。		市債(借金)や将来の職員の退職金など、将来世代が負担する金額を表しています。	
【内訳】		純資産(A-B)	82,662百万円
有形固定資産	91,229万円	現在までの世代が既に負担した金額を表しています。	
庁舎、学校、道路など			
無形固定資産	41百万円		
ソフトウェアなど			
投資その他の資産	20,514百万円		
出資金、基金など			
流動資産	7,112百万円		
現金預金、未収金、財政調整基金など			
うち現金	1,341百万円		

純資産変動計算書

前年度末純資産残高(A)	79,546百万円
純行政コスト【△】(B)	△31,287百万円
財源(C)	34,686百万円
税収、国県補助金など	
本年度差額(D)	3,399百万円
(B+C)	
その他(E)	△283百万円
資産評価差額など	
本年度純資産変動額(F)	3,116百万円
(D+E)	
本年度純資産残高(A+F)	82,662百万円

【一般会計等財務4表の会計範囲】

- 一般会計
- 公有財産管理活用事業特別会計

行政コスト計算書

経常費用(A)	33,356百万円
【内訳】	
人にかかるコスト	6,347百万円
人件費、退職手当引当金繰入額など	
物にかかるコスト	11,883百万円
維持補修費、減価償却費など	
移転支出的なコスト	14,880百万円
社会保障給付、他会計への繰出金など	
その他のコスト	246百万円
支払利子など	
経常収益(B)	2,454百万円
使用料及び手数料など	
純経常行政コスト(C)	30,902百万円
(A-B)	
臨時損失(D)	568百万円
災害復旧事業費など	
臨時利益(E)	183百万円
資産売却益など	
純行政コスト(C+D-E)	31,287百万円

資金収支計算書

本年度資金収支額(A)	145百万円
【内訳】	
業務活動収支	5,578百万円
人件費、税収など	
投資活動収支	△5,164百万円
施設整備、基金積立金など	
財務活動収支	△269百万円
市債(借金)の発行、償還	
前年度末資金残高(B)	1,149百万円
本年度末資金残高(A+B)	1,294百万円

※百万円未満を四捨五入し表示しているため、合計金額等が一致しない場合があります。

財務4表から見る伊那市の財政指標

①住民1人当たりの資産額 (万円)

令和元年度	令和2年度	19市平均	類似団体平均	令和3年度
168	176	190	194	183

庁舎、学校、道路などの固定資産や基金などが主なもので、人口、産業構造、地価、普通会計の範囲などによっても変わるため、同規模の団体でも大きくばらつきがあります。伊那市は、19市平均、類似団体3市平均より小さくなっています。

②住民1人当たりの負債額 (万円)

令和元年度	令和2年度	19市平均	類似団体平均	令和3年度
55	55	56	60	56

市債(借金)残高が主なもので、伊那市は、19市平均と等しく、類似団体平均より小さくなっています。「返すより多く借りない」方針の徹底により、年々市債(借金)残高は減少してきています。

③負債額/資産額 (%)

令和元年度	令和2年度	19市平均	類似団体平均	令和3年度
32.9	31.5	31	33.7	30.5

資産額に占める将来世代の負担の比重を示したものです。伊那市は、19市平均より大きく、類似団体平均より小さくなっています。引き続き、地方債残高の縮減に努め、将来世代の負担を軽減していく必要があります。

④住民1人当たり行政コスト (万円)

令和元年度	令和2年度	19市平均	類似団体平均	令和3年度
38	51	53	53	48

経常的な行政活動の効率性を比べることができます。伊那市は、19市平均、類似団体3市平均よりも小さくなっています。令和2、3年度はコロナ対策経費の増により金額が大きくなっています。

⑤有形固定資産減価償却率 (%)

令和元年度	令和2年度	19市平均	類似団体平均	令和3年度
63.1	63.2	61.4	61.3	63.7

資産の老朽度を示したもので、年々高くなっています。19市平均及び類似団体平均よりも高くなっていることから、更新が必要な施設が多いことが分かります。

※19市平均及び類似団体平均は、伊那市独自試算の令和2年度数値

Ⅲ 全体

【概要】

一般会計等に特別会計及び企業会計を合算したものが全体財務4表です(右記参照)。一般会計から水道事業会計への繰出金など、各会計間の取引は相殺消去をしています。

【貸借対照表】

水道事業の給水管や下水道事業の下水管などにより、一般会計等と比較して資産は69,465百万円増加します。また、下水道事業の企業債(借金)などにより、負債は61,382百万円増加します。

【行政コスト計算書】

上下水道事業の減価償却費や国民健康保険や介護保険の給付費などにより、一般会計等と比較して経常費用が14,955百万円増加し、水道料金、下水道使用料などにより経常収益が2,820百万円増加します。

【純資産変動計算書】

本年度純資産変動額は3,683百万円で、一般会計等と比較して567百万円増加します。この分、次年度以降の住民への負担が減少した(本年度の住民から次年度以降の住民へ資源が渡された)ことを意味しています。

【資金収支計算書】

水道料金、下水道使用料などにより、一般会計等と比較して業務活動収支が2,447百万円増加し、下水道事業の企業債(借金)償還などにより財務活動収支が1,837百万円減少したため、本年度資金収支額は430百万円でした。

貸借対照表

資産(A)	188,361百万円	負債(B)	97,616百万円
一般会計等の資産に加え、水道事業の給水管や下水道事業の下水管などが計上されています。		市債(借金)や将来の職員の退職金など、将来世代が負担する金額を表しています。	
【内訳】		純資産	90,745百万円
有形固定資産	157,994百万円	(A-B)	
庁舎、学校、道路、給水管、下水管など		現在までの世代が既に負担した金額を表しています。	
無形固定資産	121百万円		
ソフトウェアなど			
投資その他の資産	19,042百万円		
出資金、基金など			
流動資産	11,204百万円		
現金預金、未収金、財政調整基金など			
うち現金	4,949百万円		

純資産変動計算書

前年度末純資産残高(A)	87,062百万円
純行政コスト【△】(B)	△43,444百万円
財源(C)	47,589百万円
税収、国県補助金など	
本年度差額(D)	4,145百万円
(B+C)	
その他(E)	△462百万円
資産評価差額など	
本年度純資産変動額(F)	3,683百万円
(D+E)	
本年度純資産残高(A+F)	90,745百万円

※百万円未満を四捨五入し表示しているため、合計金額等が一致しない場合があります。

【全体財務4表の会計範囲】

一般会計等+

- ・国民健康保険特別会計
- ・国民健康保険直営診療所特別会計
- ・後期高齢者医療特別会計
- ・介護保険特別会計
- ・市営駐車場特別会計
- ・水道事業会計
- ・下水道事業会計
- ・自動車運送事業会計

行政コスト計算書

経常費用(A)	48,311百万円
【内訳】	
人にかかるコスト	6,931百万円
人件費、退職手当引当金繰入額など	
物にかかるコスト	15,440百万円
維持補修費、減価償却費など	
移転支的コスト	25,081百万円
国民健康保険や介護保険の給付費など	
その他のコスト	859百万円
支払利子など	
経常収益(B)	5,274百万円
水道料金、下水道使用料など	
純経常行政コスト(C)	
(A-B)	43,037百万円
臨時損失(D)	601百万円
災害復旧事業費、資産売却損など	
臨時利益(E)	194百万円
資産売却益など	
純行政コスト(C+D-E)	43,444百万円

資金収支計算書

本年度資金収支額(A)	430百万円
【内訳】	
業務活動収支	8,025百万円
人件費、税収、水道料金、下水道使用料など	
投資活動収支	△5,489百万円
施設整備、基金積立金、国県等補助金など	
財務活動収支	△2,106百万円
市債(借金)の発行、償還	
前年度末資金残高(B)	4,472百万円
本年度末資金残高(A+B)	4,902百万円

Ⅳ 連結

【概要】

全体に一部事務組合、広域連合、第三セクターなどを合算したものが連結財務4表です(右記参照)。連結に際しては、全部を合算している団体と、経費負担割合などに応じて一部を合算している団体があります。全体と同様に、各会計間の取引は相殺消去をしています。

【貸借対照表】

伊那中央病院の医療機器や長野県上伊那広域水道用水企業団の給水管などにより、全体と比較して資産が24,605百万円増加します。

【行政コスト計算書】

伊那中央病院の人件費や医療機器などの減価償却費などにより、全体と比較して経常費用が17,339百万円増加し、医業収益などにより経常収益が8,492百万円増加します。

【純資産変動計算書】

本年度純資産変動額は3,571百万円で、全体と比較して112百万円減少します。この分、次年度以降の住民への負担が増加した(次年度以降の住民の資源が減った)ことを意味しています。

【資金収支計算書】

全体と比較すると、財務活動収支が564百万円減少します。連結団体が地方公共団体だけではないため、第三セクター等による借入金も含まれています。減少となっていることは借入額よりも償還額の方が大きいことを示しています。本年度資金収支額は1,239百万円でした。

貸借対照表

資産(A)	212,966百万円	負債(B)	110,188百万円
全体の資産に加え、伊那中央病院の医療機器や長野県上伊那広域水道用水企業団の給水管などの資産が計上されています。		市債(借金)や将来の職員の退職金など、将来世代が負担する金額を表しています。	
【内訳】		純資産	102,778百万円
有形固定資産	175,856百万円	(A-B)	
学校、道路、給水管、下水管、]		現在までの世代が既に負担した金額を表しています。	
無形固定資産	123百万円		
ソフトウェアなど			
投資その他の資産	20,755百万円		
出資金、基金など			
流動資産	16,232百万円		
現金預金、未収金、財政調整基金など			
うち現金	8,231百万円		

純資産変動計算書

前年度末純資産残高(A)	99,190百万円
純行政コスト【△】(B)	△52,292百万円
財源(C)	56,383百万円
税収、国県補助金など	
本年度差額(D)	4,091百万円
(B+C)	
その他(E)	△520百万円
資産評価差額など	
本年度純資産変動額(F)	3,571百万円
(D+E)	
本年度純資産残高(A+F)	102,761百万円

※百万円未満を四捨五入し表示しているため、合計金額等が一致しない場合があります。

【連結財務4表の会計範囲】

全体+

- ・伊那市振興公社
- ・伊那市観光株式会社
- ・伊那中央行政組合
- ・上伊那広域連合
- ・長野県上伊那広域水道用水企業団
- ・長野県後期高齢者医療広域連合
- ・長野県地方税滞納整理機構
- ・長野県民交通災害共済組合
- ・長野県市町村自治振興組合

行政コスト計算書

経常費用(A)	65,650百万円
【内訳】	
人にかかるコスト	13,193百万円
人件費、退職手当引当金繰入額など	
物にかかるコスト	20,785百万円
維持補修費、減価償却費など	
移転支的コスト	30,044百万円
社会保障給付など	
その他のコスト	1,628百万円
支払利子など	
経常収益(B)	13,766百万円
水道料金、下水道使用料、医業収益など	
純経常行政コスト(C)	
(A-B)	51,884百万円
臨時損失(D)	607百万円
災害復旧事業費、資産売却損など	
臨時利益(E)	194百万円
資産売却益など	
純行政コスト(C+D-E)	52,297百万円

資金収支計算書

本年度資金収支額(A)	1,239百万円
【内訳】	
業務活動収支	9,725百万円
人件費、税収、水道料金、下水道使用料、医業収益など	
投資活動収支	△5,816百万円
施設整備、基金積立金、国県等補助金など	
財務活動収支	△2,670百万円
市債(借金)の発行、償還	
前年度末資金残高(B)	7,023百万円
比例連結割合変更に伴う差額(C)	△80百万円
本年度末資金残高(A+B+C)	8,182百万円

財務4表から見る伊那市の財政状況における課題

P2の「財務4表から見る伊那市の財政指標」において、いくつかの指標を掲載してありますが、その指標から見えてくる伊那市の財政状況における課題を分析しました。

【将来世代の負担割合】

図1からわかるように、伊那市は、他市と比較して将来世代の負担割合(資産額に対する負債額の割合)が大きいことがわかります。これは、今まで作ってきた学校や道路などの資産に対して、市債(借金)を活用した割合が多いことを意味しています。

課題:市債(借金)残高が多い

市債(借金)には、世代間の負担平準化を図る目的もあるため、ある程度の借入は必要です。また、市債(借金)には返済金の一部を国が負担してくれる有利なものもあるため、一概に残高での比較が負債の大きさを表しているとは言えませんが、健全な財政の状態を維持するためには、市債残高を減らしていく必要があります。伊那市では、「返すより多く借りない」の方針を掲げ、市債残高の縮減に努めています。(図2)

【有形固定資産減価償却率】

「統一的な基準」による財務書類の作成に伴い、固定資産台帳を整備したため、伊那市が保有する資産がどの程度老朽化しているかがわかるようになりました。この資産の老朽度を示す指標が「有形固定資産減価償却率」です。

図3からわかるように、伊那市は他市と比較して高い数値になっています。数値が高いほど老朽化が進んでいることとなりますので、伊那市の多く施設が更新時期を迎えつつあることを意味しています。

課題:資産の老朽化が進んでいる

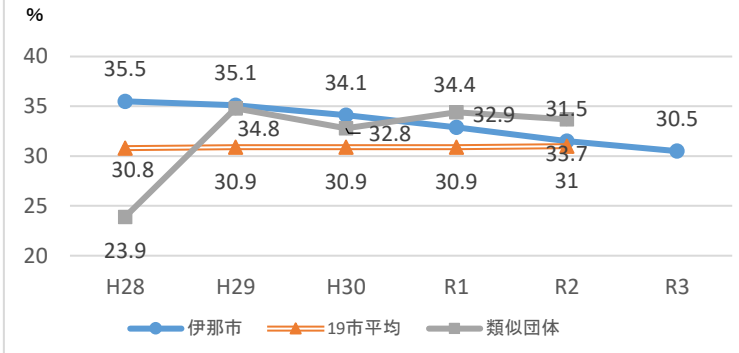
施設の更新時には、将来の人口減少などを考慮し、統廃合などを検討しなければなりません。伊那市では、「第2期伊那市公共施設等総合管理計画」を策定しており、その中で事業用資産の総量を8%減少と、長寿命化による更新費用の23%縮減させることを目標としています。また、個別施設計画に基づき、各施設の更新費用の平準化を図るとともに、施設の統廃合や長寿命化を進め、公共施設の適正管理に努めていきます。

【健全な財政運営に向けて】

平成28年度決算から全国の自治体が「統一的な基準」による財務4表を作成しているため、他市との比較が容易になりました。他市との比較をすることで上記のように伊那市の財政状況における課題が見えてきます。

より健全な財政運営に向けて財務書類を活用していきます。

図1 将来世代の負担割合(負債額/資産額)



※類似団体のR2数値は未発表(以下同じ。)

図2 市債(借金)残高

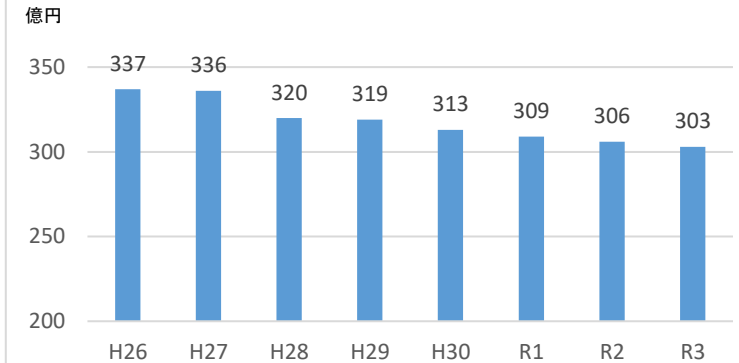


図3 有形固定資産減価償却率

